

氏名(本籍)	王 明 亮(中華人民共和国)
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	甲第86号
学位授与年月日	令和2年3月15日
学位授与の要件	文部科学省令学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	中国・蒙古族の子どもの体力向上に関する基礎的研究 —生活習慣や運動習慣及び体育授業の在り方を中心にして—
審査員	主査 日本体育大学 教授 近 藤 智 靖 副査 日本体育大学 教授 今 関 豊 一 副査 日本体育大学 教授 角 屋 重 樹

《論文審査結果の要旨》

「中国・蒙古族の子どもの体力向上に関する基礎的研究—生活習慣や運動習慣及び体育授業の在り方を中心にして—」というテーマを追究するために、テーマを見いだすための研究背景や問題所在を述べ、次に研究の目的を設定している。このようにして設定した目的を達成するため、「中国・蒙古族の子どもの体力向上の課題の顕在化」を第1章と、「中国・蒙古族の子どもの体力向上を目指した実践的な試み」を第2章、という2部で論文を構成した。

論文の概要は、以下のものであった。

1 研究背景と問題所在

体力は人間の発達・成長を支え、人として創造的な活動をするために必要不可欠なものであり、体力が低下し続ければ、子ども達の健康への悪影響、気力の低下などが懸念されるととらえた。そのため、世界の国々が国民の体力向上を国事と考え、これまで様々な政策を実施してきたことを述べている。そして、日本と中国の子どもの体力に関する近年の報告を取り上げ、子どもの体力は両国共に低下傾向であること、及びその背景には、子どものスポーツや外遊びの減少が直接的な要因であることを指摘した。

2 目的と目的達成のための構想

前項で述べた問題の所在のもとに、まず、中国・蒙古族の子どもの体力・生活・体育授業・授業評価の現状を検討し、体力向上の課題を明らかにしている。次に、明らかになった体力向上の課題を改善するため、体育教師に授業改善の介入を実施し、体力向上の課題の改善に影響を及ぼすか否かを検討するという目的を設定した。

このため、「中国・蒙古族の子どもの体力向上の課題の顕在化」という第1章と「中国・蒙古族の子どもの体力向上を目指した実践的な試み」という第2章に分けて、論を構成した。

第1章 中国・蒙古族の子どもの体力向上の課題の顕在化

第1節 研究の目的

中国・蒙古族の子どもの体力・生活・体育授業・授業評価という視点から検討し、それらに関する課題を明らかにする。

第2節 研究の方法

上述の目的を達成するために、体力・生活に関する側面と体育授業・授業評価に関する側面からそれぞれ調査を行った。

2・1 体力・生活に関する調査

対象は、中国・内蒙古自治区の都市および牧区に位置する蒙古族小学校2校に在籍する小学5、6年生の245名であった。期間は、2017年5月1～5日であった。体力は、体格・姿勢・自律神経機能を、生活は、生活時間・生活状況を調べた。

2・2 授業・授業評価に関する調査

対象は、中国・内蒙古自治区の都市および牧区に位置する蒙古族小学校2校に在籍する小学4年生のボール投げ授業とサッカーの授業、各一時間であった。時期は、2017年5月1～5日であった。

第3節 結果

体格は、男女の身長と体重および男子のローレル指数に統計的な地域差は確認されなかったものの、女子のローレル指数は都市に比して牧区で有意に高値を示した。背筋力は、性要因の主効果では統計的な有意差があった。女子に比して男子のほうが高値であった。寒冷昇圧反応は、地域要因の主効果には統計的な有意差が検出され、牧区に比して都市の昇圧反応が有意に高値を示した。生活は、一日中全く運動をしていない子どもの割合は、都市は16.3%、牧区は7.0%であった。生活が体力に及ぼす影響は、放課後の運動習慣「なし」では、背筋力が低くなるリスクが2.072倍、寒冷昇圧反応が非標準群に判定されるリスクが2.072倍になることが明らかになった。授業は、マネジメント場面と学習指導場面の時間量の割合が高く、運動学習の時間量の割合が低かった。授業評価の総合点は、都市は5段中3、牧区は5段中4であった。

第4節 結果のまとめと含意

本章の研究結果をまとめると、牧区に比して都市の「体育授業及び子どもの防衛体力・運動習慣・授業評価」が低い現状であることが確認された。このような結果からは、蒙古族の学校体育の質が、子どもの体育授業評価や運動習慣の育成に影響し、体力の低下に影響を及ぼしていると考えられる。

これまで述べてきたことから、中国・蒙古族の子どもの体力向上を実現するには、

- (1) 体育授業を改善すること
- (2) 子どもの体育授業に対する評価を高めること
- (3) 運動習慣を育成すること

が必要と考えた。

第2章 中国・蒙古族の子どもの体力向上を目指した実践的な試み

第1節 研究の目的

前章で述べた体力向上の課題を改善するために、高橋らが提唱する「子どもが評価するよい体育授業」の基礎的条件の理論に基づいて、体育授業を改善する介入を行い、その介入効果を検討した。

第2節 研究の方法

対象は、蒙古族の小学校の女性体育教師1名の4年生のバスケットボールの授業に対して、授業改善の介入を行った。調査項目は、教師の「感想・志向性」、子どもの授業評価・運動有能感・運動習慣の調査を実施した。期間は、2018年3月21日～6月15日であった。

第3節 結果

結果を、以下の2点に整理している。

- ① 体育授業を改善する実践により、教師の授業に対する「考え方・行動」が改善され、子どもの授業評価と運動有能感を高め、子どもの運動習慣が改善されたこと。
- ② 前章の体力向上の課題である「授業の運動学習場面の時間量の割合」「子どもの授業評価」「子どもの放課後の運動習慣」が全面的に向上したこと。

をそれぞれ明らかにした。

今まで述べてきた本研究の特徴は、以下の2点に整理できる。

- 1 中国・蒙古族の子どもの体力について、日本の子どもと対比しながら多面的な側面から顕在化したこと。
- 2 体育授業の改善及び子どもの体育授業に対する評価・運動有能感を高め、運動習慣を育成に有効な方法を用いて中国・蒙古族の子どもの体力を向上させたこと。

なお、本論文の作成過程で、海外の研究動向も踏まえて、学術的に価値ある課題を見いだし、その課題を学術的に追究していくことから、問題を見いだす能力や研究を論理的に展開する能力を筆者は獲得していると判断できた。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(教育学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められた。

《最終試験結果》

合格・不合格

令和2年1月13日